

# ホスピス・緩和ケア病棟からの一時退院が 遺族からみた患者のQOLに及ぼす影響とその関連要因

## 遺族調査（J-HOPE3研究）データの二次分析

---

麻生 咲子<sup>1),2)</sup>, 林 直子<sup>2)</sup>, 関本 剛<sup>3)</sup>, 中山 直子<sup>4)</sup>, 田村 恵子<sup>5)</sup>, 山本 知枝子<sup>6)</sup>  
青山 真帆<sup>7)</sup>, 森田 達也<sup>8)</sup>, 木澤 義之<sup>9)</sup>, 恒藤 暁<sup>10)</sup>, 志真 泰夫<sup>11)</sup>, 宮下 光令<sup>7)</sup>

- 1) 静岡県立静岡がんセンター、2) 聖路加国際大学大学院、3) 関本クリニック、4) 神奈川県立保健福祉大学、5) 大阪歯科大学、  
6) 春日井リハビリテーション病院、7) 東北大学大学院、8) 聖隷三方原病院、9) 筑波大学、10) 京都大学、  
11) 筑波メディカルセンター病院

# 1. 研究の背景

---

## ◇ホスピス・緩和ケア病棟の役割は変化している

“看取る場所” ⇒ “専門的緩和ケアにより症状緩和を図り、地域へ帰す場所”

## ◇日本人を対象とした調査では、“最期は自宅で” と希望する人が多い

## ◇先行研究から、患者のQOL（生活の質）は自宅で亡くなった人が最もよい

自宅 > ホスピス・緩和ケア病棟 > 一般病棟

しかし実際には、

**多くの人**が病院（ホスピス・緩和ケア病棟や一般病棟）で亡くなっている

ホスピス・緩和ケア病棟で死亡した患者にとって  
一度でも自宅に帰ることができた体験は  
患者のQOLによい影響を及ぼすのだろうか？

## 2. 研究の目的

---

ホスピス・緩和ケア病棟からの一時退院の有無が  
患者のQOLに及ぼす影響とその関連要因を探索する

# 終末期がん患者のQOLをどうやって測る？

## **GDI : Good Death Inventory** (遺族による緩和ケアのアウトカム尺度)

日本人の「Good Death」にもとづき

がん患者の終末期のQOLを 遺族の代理評価 (質問紙調査) により測定する

全 18 項目 (コア10項目・オプション8項目)

### **Good Death コア10項目 (多くの日本人が大切だと考える10項目)**

身体的・心理的なつらさが和らげられている	家族や友人とよい関係でいる
望んだ場所で過ごす	自立している
希望や楽しみがある	落ち着いた環境で過ごす
医師や看護師を信頼できる	人として大切にされる
家族や他人の負担にならない	人生を全うしたと感じる

※上記の他に人により重要さは異なるが日本人が大切だと考える8項目がある

## 3. 研究方法

---

### 【対象者】

日本ホスピス緩和ケア協会加入のホスピス・緩和ケア病棟（133施設）で  
死亡した患者の遺族 **571名**

J-HOPE3（**遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究3**）の付帯研究  
「ホスピス・緩和ケア病棟から自宅へ一時退院することについての  
家族の体験と評価に関する研究」のデータを二次分析した

## 4. 分析

---

### 1) ホスピス・緩和ケア病棟からの一時退院の状況

ホスピス・緩和ケア病棟からの一時退院を経験した患者の割合はどれくらいか？

### 2) ホスピス・緩和ケア病棟からの一時退院とQOLの関連

「**一度も退院せず**ホスピス・緩和ケア病棟で亡くなった人」

「一時退院して自宅で過ごした期間が**2週間未満**の人」

「一時退院して自宅で過ごした期間が**2週間以上**の人」

QOLに  
差があるか？

### 3) 自宅で過ごした期間と患者・家族の状況との関連

自宅で長く（2週間以上）過ごすことができた人にはどのような特徴があるか？

## 5. 結果 1 一時退院の状況

① ホスピス・緩和ケア病棟から自宅へ一時退院したことがある患者は**15.8%**だった

一時退院あり	90名	<b>15.8%</b>
一時退院なし	481名	84.2%

② 3分の1の患者は一時退院後、自宅で1か月以上過ごすことができていた。

一方、4分の1の患者は3日以内に再入院していた。

再入院までの期間	人数 (人)	(%)
1～3日	25	25.6%
4～6日	9	10.0%
1週間以上2週間未満	11	12.2%
2週間以上1か月未満	16	17.8%
1か月以上	29	32.2%

## 5. 結果 2 一時退院の有無・自宅で過ごした期間とQOLの関連

- ◇ GDI18項目の合計得点、コア10項目の合計得点とも  
一時退院し、自宅で2週間以上過ごした患者ほど高かった

得点が高い = QOLがよい

	範囲	一時退院なし	一時退院あり		P
		平均±標準偏差	2週間未満 平均±標準偏差	2週間以上 平均±標準偏差	
<b>GDI 全18項目合計得点</b>	18-126	82.7 ± 13.8	83.0 ± 13.5	88.0 ± 12.7	0.045
<b>GDIコア10項目合計得点</b>	10-70	48.0 ± 8.4	48.5 ± 8.4	50.7 ± 7.8	0.037

- ◇ 項目別に比較すると「自立している( ≡患者の自立度 )」で3つのグループに明らかな差があった

遺族からみた患者のQOLは、自宅へ一時退院し長く過ごした患者ほどよかった  
ただし、患者の自立度の高さに影響を受けた可能性がある

## 5. 結果3 一時退院後自宅で過ごした期間と患者・家族の状況との関連

---

ホスピス・緩和ケア病棟から自宅への一時退院を経験した患者90名について

自宅で過ごした期間が2週間以上の患者は、2週間未満の患者と比べて

- ① 退院前、痛みなどの**症状がよりよくコントロール**されていた
- ② **自宅で過ごす期間があらかじめ決まっていた**患者が多かった
  
- ③ 入院中と比べて、**患者はよく食べられるようになった**
  
- ④ 入院中と比べて、**家族はよりよく眠ることができた**
- ⑤ 入院中と比べて、**家族は気持ちがりより穏やかになった**

## 6. まとめ

---

- 1) 患者のQOLはホスピス・緩和ケア病棟から一時退院し、自宅で長く過ごした患者でよりよかった
- 2) ホスピス・緩和ケア病棟からの一時退院を経験した患者・家族について自宅で長く（2週間以上）過ごすことは、患者の食欲増進  
家族の睡眠状況の改善、家族の気持ちの穏やかさに関連していた

**ホスピス・緩和ケア病棟に入院中の患者は  
一時的であっても自宅退院を検討する意義がある**